

母娘で食べられる花育て 花は世につれ縁を結ぶ

エディブルフラワーを栽培する山崎いずみさん、ななこさん



エディブルフラワーのハウスで、花の世話を
する山崎さん母娘



ななこさん

金森町に在住の山崎いずみさんは、自宅の近所にある畑地の一角を借りて、エディブルフラワー(食べられる花)を栽培しています。
ヴィオラやナデシコなどの可憐な花が並ぶハウスには、毎日のように次女のななこさん(小学5年生)が訪れて母娘で水やりなどの世話をしています。

実家の養蜂農家に思い馳せ 食べられる花の栽培始める

見た目も華やかで写真映えするとして、エディブルフラワーを使った料理や菓子の人気が高まり需要も増えています。

山崎いずみさんは長野県出身で実家には農業と養蜂を営む祖父父母がいました。子どものころから山や自然に囲まれて育ち、土いじりや農業に慣れ親しんでいました。平成20年に守山に引っ越し

てきてから畑を借りて小さな家庭菜園を楽しんでいました。

いずみさんも、家庭菜園の片隅で食べられる花を育て、親子で料理をする時などに使っていました。かわいい花を使う料理を3人の子どもたちはとても喜んでくれました。

転機が訪れたのは平成27年。実家で祖父父母が大切に育てていたミツバチが突然大量死したのです。落胆するとともに原因が不明なことに危機感が募りました。そのころから、仕事として

花を育てることを考え始めたそうです。
現在、住宅街の中のハウス2棟(200㎡)で育てている花は年間20種類ほど。食べられるお花を栽培する仕事は優雅で楽しそうと思いかもかもしれませんが作業はとて大変です。農薬は一切使えない、虫が花びらをひと噛みでもしたら商品にならないので毎日が雑草と虫との闘い。仕事として利益が出るようになるまでは長い時間が掛かったといえます。

それでも、花の栽培は間接的にミツバチのためになります。いずみさんは「いつになるかわからないけれど、将来は花の栽培とともに養蜂もやってみたいと思います」と話していました。

花を大切に思う同志 母娘で通う花ハウス

いずみさんの食べられる花を栽培する仕事を、間接的に後押し

したのは次女のななこさんです。3人の子どものうち、ななこさんは小さいころから花が大好きでした。学校帰りに道端の花を摘んできてコップに飾るような子だったそうです。

今では、毎日のように花を栽培しているハウスに立ち寄り、お花に水をあげたり虫取りをしたりお母さんの手伝いをしています。こども生け花教室にも通っていましたが、今年の3月からは本格的に華道を習い始めました。6月に市民ホールで開かれた華展では、お母さんのハウスで摘んだ食べられる花を生け花にして出品しました。小学校のハーフ成人式でも、未来の自分に宛てて「私はお花が好きです。10年後の私もまだお花が好きですか」という手紙を書いたそうです。

食べられる花というと、美しく映えるけれど味はあまりないように思いがちですが、それぞれに味や香りがあります。ななこさんが好きなのは可愛いピンク色で蜜の甘いフロックスというお花です。

育てている花をまず食べてみるのもいずみさん母娘の仕事。大好きな花の世話をしたり、実際に食べてみたり、母娘という

より「お花を大切に思う同志という気持ちになる事があるといえます。

家事、子育て、離れず仕事 働く背中で子どもに伝える

家事に子育てと忙しい毎日の中で起業を志したのは、県が主催するセミナーに参加したのがきっかけでした。才能があつて、起業へのモチベーションもあるのに「場所」がないという多くの女性がいる事を知ったといいます。

「ご主人が東京や海外に単身赴任で留守がちな家庭を守りながら、家庭の在るべき場所から離れずに仕事したい。そのモチベーションはいずみさん自身の中にもありました。女性たちの思いが刺激となって「場所が

ないなら作る」と、いずみさんは2013年 coworkingスペースの運営を始め、現在は15人の男女さまさまな世代が利用しています。NPO法人のボランティアとしても活動を始めました。

2017年から始めたエディブルフラワーの栽培ハウスには、時々 coworkingスペースで仕事をしている人や近所の人なども手伝いに来てくれて、ワイワイと賑やかに作業をしています。
いずみさんは「今のハウスは住宅街の中なので、養蜂の夢はまだ遠いけれど、仕事をする私の姿を通して、精神的な強さや仕事をしてお金の大切さや稼ぐ大変さを子どもたちに伝えたい。私自身も仕事を通してひとつひとつ学びながら進みたい」と話していました。



いずみさん



エディブルフラワーを使った華やかな料理



お母さんの育てた花を使って生け花展に出品したななこさん



ハウスの手伝いに来てくれた人たちと楽しく作業